

ミニチュア富士山「富士塚」とは？

浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館
2026年6月
WEB版



【図1】歌川芳藤「庚申年富士山参詣群集之図」

歌川芳藤の「庚申年富士山参詣群集之図」【図1】には、富士山に登拝する富士講の人々が描かれています。富士講とは、江戸時代中頃に広まった富士山への登拝を目的とした山岳信仰の集まりです。富士講の興の祖ともいわれる食行身祿（一六七〜一七三三）によって「富士山を拝み、報恩感謝をする」という教えが庶民の間に広まり、人々は富士講を作って富士山に登拝し、社会の安定などを願いました。富士講は、「江戸八百八町に八百八講」と言われるほど、江戸末期に隆盛を迎えました。

この浮世絵が描かれた万延元年（一八六〇）の年は暦で庚申の年にあたります。富士山が庚申の年に出現したという伝説から、この年に富士山を拝むと33回登ったのと同じご利益が得られるほか、普段富士山への登拝が許されていない女性たちも五合目まで登ることができたため、【図2】のように多くの人が富士



【図2】歌川芳藤「庚申年富士山参詣群集之図」(抜粋)

に登れました。しかし、全ての人が富士山に登れたわけではありません。その後誰でも富士山に登れるようにとの思いから、「富士塚」という人工の築山が江戸の町にたくさん造られました。「富士塚」に登れば、険しい山道を登らずとも実際の富士登山と同じご利益を授かることができ、旅費や時間もかからなかったため、江戸の町では老若男女問わず多くの人が富士塚に登りました。

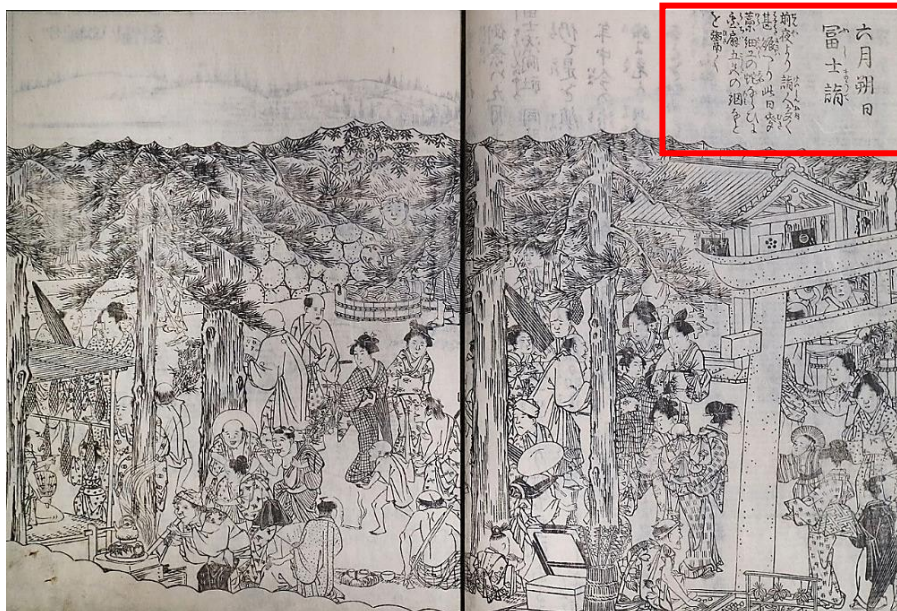
最初の「富士塚」は、富士信仰を広めた食行身祿の弟子である高田藤四郎たかだ とうしろうによって安永8年(1779)に造られました。藤四郎は富士講の信徒たちと協力して、高田の水稻荷(現在の早稲田水稻荷神社)の境内に高さ10mほどの塚を築きました。塚は「黒ボク石」という富士山の溶岩やそれに類似した岩石で覆われ、頂上には富士山頂の土を埋めたとあります。江戸の名所や旧跡を記録した【図3】の『東都名所図会』にも登場していることから、江戸の名所として人々に知られていたことがうかがえます。この富士塚は「高田富士」と呼ばれ、やがて江戸の各町に「高



【図3】斎藤月岑 長谷川雪旦 『東都名所図会 高田富士山』

田富士」を模した富士塚が造られました。

【図4】の『東都名所図会』は、富士浅間社(現在の駒込富士神社)内で行われた「富士詣」の様子が描かれています。富士塚はいつでも自由に登れるものではなく、富士山の「山開き」の期間や庚申の年などに合わせて登ることができました。富士講と同じく旧暦の6月1日(現在では7月上旬)に「山開き」の儀式が行われ、人々は富士塚に登りました。特に山開きの当日は屋台や見世物小屋などが多く立ち並び、にぎわいをみせていたようです。実際に神聖な山に登る富士講とは異なり、『東都名所図会』に描かれる富士塚の例祭は、信仰と娯楽を兼ねたものだったことがうかがえ、人々からは楽しそうな雰囲気を感じられます。



江戸時代において、旧暦の6月1日が現在の「山開き」にあたりました。この箇所には、「前日の夜から詣でる人が多く、麦わら細工の蛇や団扇、5色の網などが売られていた」とあります。

図4 斎藤月岑 長谷川雪旦 『東都名所図会 富士浅間社六月朔日富士詣』

江戸時代に流行した富士塚は、明治時代になると新政府による神仏分離政策の影響から新たに築造される数は減少しましたが、荒廃した富士塚を再建しながら、富士講による信仰は続いていました。しかし、戦後になるとさらに富士講が減少したことともなって富士塚が築造されることなく、都市整備や開発等でほとんどの富士塚が解体・縮小されました。

そのような時代の流れの中でも、現代に残る富士塚があります。【図5】は、東京都品川区の品川神社境内の「品川富士」です。この富士塚は明治2年〜5年(1869〜72)にかけて築造され、現存する富士塚の中でも最大級とされています。「品川富士」は、現在も7月上旬に富士講によって山開きの神事が行われており、江戸時代から続く富士信仰と富士塚の歴史を伝えています。

今回は、展示に関連して「富士塚」について紹介しました。富士塚は、江戸時代の庶民にとって身近な富士信仰の象徴であり、時代や社会の変化を受けながらも今日まで大切に守られてきました。本記事や開催中の展示を通して、形を変えながら現在も続く富士信仰の文化と富士塚に興味を持っていただければ幸いです。



【図5】「品川区指定有形民俗文化財 品川神社富士塚」品川神社

開催中の展示

藤沢で山開き 浮世絵で登る富士山

2026年5月19日(火)~7月5日(日)